
そして季節は・・・

神田雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして季節は・・・

【Nコード】

N3457A

【作者名】

神田雅

【あらすじ】

『佳山沙夜』は中学3年生。クラス換えで、席が隣になったのは学年の秀才くん。彼が少し苦手な沙夜は・・・。

第一幕　偶然

― 中学3年生の春。私は生まれ初めて人を好きになった―

始業式。クラス替えがある日

私にとって、特別な日

「ねえ沙夜、うちら同じクラスだよ」

親友の真麻が私に声をかけてきた。

「ええ本当！？やったあ」

私は、真麻や他の悪友達と話をしながら、教室に向かった。

「よし、名簿順に席に着いて」

先生が教室内に入ってきて、そう言った。私の隣の席になったのはなんと・・・『須木 彰』

陸上部の彼は、成績トップで、私にとっては雲の上の存在なのである。私は中学に入ってから、彼とはほとんど話していない。

そついう訳で、私はその日、彼と一度も話さなかった。

その時の私の気持ちは、正直言つて（一ヶ月もつかない）という意味不明な心配だった。

第一幕ゝ偶然ゝ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。もし結末が見えても、そこは目を瞑って読んで頂けたら嬉しいです。

第二幕　変化

そして次の日……

　　〔朝自習の時間〕

私が偶然、彼の筆箱をふとみると、可愛いパンダのストラップが！！
（意外、須木君もこんなもの付けるんだ。てか、これ結構かわいいんですけど）

私は数分間悩んだ末、勇気を出してストラップを手にとった。私にとっては、それだけでも結構凄いことだ。

「ねえ須木君、これかわいいね。買ったのぉ？」

私は思わず、彼にそう聞いた。

「いや、ジュースのおまけだったんだ」

「へえ、ジュースに付いてるんだあ。知らなかったあ」

彼は、私の手からストラップを自分の手に移した。その後、ストラップを見ながら言った。

「『千客万来』……あはは、ほら」

そう言って彼は、私にストラップのパンダの上の方にある文字を見せた。

「本当だあ、パンダなのに小判持ってるし、ふふっ」

微笑んでいた私の目は自然とストラップの方にいつていた。すると彼は、私の紅い筆箱の方に目をやり、それを自分の方へと引き寄せた。

「俺のより、沙夜さんの筆箱の方に付けた方が合うと思わない？」
「えっ！？」

私は思わず、彼の顔を凝視してしまった。

（なんで、うつそあ。須木君ってこんなキャラだったっけ？全然違う雰囲気あるイメージなのに）

「くれるの？」

私は恐る恐る彼に聞いてみた。

彼は少し笑うと、ストラップを外しながら答えた。

「うんいいよ、あげる。はい」そう言い、私に手渡してくれた。

「あっありがとう。んじゃあ早速、付けよう。……………やっぱ可愛い」

この時から、私の彼に対するイメージが変わった気がする。我ながら単純だと思っけど……………。

それから数日間で、私は須木君と打ち解けることが出来た。

須木君はいろんなことを話してくれた。将来の夢の話、塾でのこと。そして一ヶ月は、あっという間に過ぎ、席替えの時期が近付いてきた。

第三幕　動くココロ

月末になり、学級委員が席替えを提案した。須木君は視力が低下しているため、前の席になっていた。

まあ関係ないけど・・・

順番が私にまわってきた。適当にくじを引き、番号を見た。

私は一番前の席、しかも須木君の隣になった。

「沙夜また須木の隣じゃん」

「うん、私もびつくりした」

（これって運命！？）

「また隣だね」

私は、須木君に早速話しかけた。

「うん、凄い偶然」

須木君も笑顔でかえしてくれた。

私は多分、この時から須木君が好きだったのかもしれない。

その証拠が体育大会でのこと。

最終種目、団対抗リレー。うちの団は4組中2位。須木君はアンカ―で、200mをダッシュ！そして、見事1位になった。須木君はゴールすると、その場に倒れてしまった。

（須木君、かつこいいし、すごい）

おかげで、うちの団は勝つことが出来た。

それから私は、家に帰宅した。

「ただいま」

リビングに入ると、お母さんとお父さんが揃って座っていた。

「おかえり、沙夜」

「二人共一緒なんて珍しいね、どうしたの？」

私は、鞆を置きながら言った。いつもだったら、お父さんは夜遅くに帰るのだから。

「まあな、実は俺の転勤が決まってな、来月なんだが」

「そう遠くじゃないのだけど、県外だから家族皆で行こうって、お父さんとも話し合ったの。その方が良いと思って」

正直言つて驚いた。だって、好きな人が出来たと思つたら、お父さんが転勤だなんて、まるで、物語の世界みたいだ。

「私、転校しないといけないの？」

多分、半分泣いてたと思う。

「そうね。でも大丈夫よ、1年だもの」

「うん」

（1年だけど、それが今年はずごく貴重なのに……折角好きな人が出来たのに、なんで）

私の心は、不安定になっていた。

その夜私は、夜遅くまで泣いた。

第四幕　終りの刻

「おはよう、沙夜」

朝、いつも通りの通学路を歩いて、学校に行っていると、後ろの方から真麻が私に声を掛けてきた。なに一つ変わらない日常が、ここにはあった。でも真麻とも、もう少しでお別れ。私はあと少しで、この学校からいなくなってしまうのだから……。

「どったの？　なんか元気ない」

「うん、私ね来月に転校するんだあ」

「えっ！？　そっか、あと一年で卒業だったのに寂しくなるね」

その日一日、特に変わったこともなく過ぎた。それはそうだ、何かあったら逆に困る。

それから一ヶ月も、色々あったようだが、

私には直接関係の無いような事ばかりあったので、よくは判らない。そんなこんなで、転校日前日になった。

「……ということ転校することになりました。皆さんお元気で」

「うん、沙夜も元気だね」

「じゃあね、沙夜」

友達やクラスメートと最後の別れをし、教室を出ようとすると、須木君が声をかけてきた。

「転校するんだあ」

「うん、まあね」

「向こうでも、頑張って」

そう言って須木君は笑った。

「うん、頑張るよ」

そして私は学校を後にした。そのあと、横断歩道で停まり、信号が青に変わったのを確認。そして渡った。

「あっ！あぶなっ」

キキーン！

これが私が最期に聞いた言葉と、そして音だった。そのあとのこと
を私は、何も知らない。そして私の命と人生が幕を閉じた。

そして季節は、また動き巡っていく・・・。

第四幕　終りの刻（後書き）

意味不明。。。。

一応『永遠の片想い』がテーマです。
これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3457a/>

そして季節は・・・

2010年10月10日01時09分発行